

## think, doubt, wonder の語法研究

川瀬, 義清

<https://doi.org/10.15017/2332702>

---

出版情報 : 文學研究. 75, pp.15-27, 1978-03-31. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# *think, doubt, wonder* の語法研究

川 瀬 義 清

## 0. 序

英語の動詞の中に、思考動詞 (Verbs of thinking) と呼ばれる一群の動詞がある。これらの動詞は補文構造をとり、動詞は補文に対する主語の心的状態をあらわし、補文はその思考内容をあらわす。この思考動詞の代表的なものは *think* である。*doubt* や *wonder* も思考動詞であるがこれら二つの動詞は、*some-any* との共起や談話指示性等に関して、*think* とはかなり異なった現象を示す。これらの動詞はかなり色づけされた思考をあらわすようである。本論では、*doubt* と *wonder* があらわす心的状態について、*think* と比較しながら考察してゆくが、まず第1章では、これらの動詞の具体的使用について概観し、第2章ではそれらの分析を行ない、第3章ではこれらの動詞に伴う思考内容と話者との関係について触れてみたい。

1. この章では、*think, doubt, wonder* の使用において見られる具体的言語事象を見てみたい。

### 1.1 *some-any*との共起の問題

- (1) a I think that John has *some* books on linguistics.
- b I doubt that John has *any* books on linguistics.
- c I wonder if John has *any* books on linguistics.

これらの例が示すように、一般に *think* の補文の中では *some* が用いられ、*doubt, wonder* の補文の中では *any* が用いられることが多い。とこ

ろが(1)は、否定形にすると(2)のようになる。<sup>1)</sup>

(2) a I don't think that John has *any* books on linguistics.

b I don't doubt that John has *some* books on linguistics.

(1), (2)からわかるように、補文の中での *some* と *any* のあられ方は、*think* と *doubt* では丁度逆になっている。

学校文法では、*some* は肯定の平叙文とともに用いられ、*any* は否定文、疑問文、条件文等とともに用いられる、というようによく言われることがあるが、実際には、*some* は否定文や疑問文の中でもあられる。ここで *some* と *any* がどのように用いられるかを少し検討してみたい。

(3) a I don't like *some* of them.

b I don't like *any* of them.

(4) a Who wants *some* beans?

b Who wants *any* beans?

(3)は否定文、(4)は疑問文であるが、いずれも (a) では *some*、(b) では *any* が用いられており、(a)と(b)とでは意味が異なる。(3a)は、「それらのうちのあるものは好きでない」の意で、話し手の思考の中では好きでないものは定まっている。つまり存在がはっきりしている。一方 (3b)は「どれも好きでない」であり、話し手の思考の中で好きでないものが特定の存在として限定されているわけではない。(4a)においても話し手の思考の中には一定量の豆が存在している。しかし (4b) では定まった特定のものが存在しているわけではない。このように話し手の思考の中に一定のものが存在しておれば *some* が用いられ、存在が不定であれば *any* が用いられる。このように考えると、(1)から、*think* の文では「本」は「私」にとって定まった存在としてとらえられおり、*doubt* と *wonder* の文では「本」の存在が不定なものとしてとらえられている。

## 1.2 談話指示性 (discourse referent)

談話指示性とは、ある談話の中の非特定の不定名詞句 (non-specific

indefinite noun phrase) がその 談話 の 中 で 同 一 指 示 的 代 名 詞 (coreferential pronoun) あるいは定名詞句 (definite noun phrase) によって受けられるかどうかの問題である。即ち(5)において、

- (5) John has *a car*. Bill has seen  $\left\{ \begin{array}{l} it. \\ the\ car. \end{array} \right.$

'a car' を 'it' または 'the car' で受けられるかどうかということである。(5)では受けられるので談話指示性は成立している。think, doubt, wonder の場合について、この談話指示性が成立するかどうか調べてみよう。

- (6) a I think John has *a car*. Bill has seen *it*.  
b I doubt John has *a car*. \*Bill has seen *it*.  
c I wonder if John has *a car*. \*Bill has seen *it*.

(6)からわかるように、談話指示性が成立するのは think の文のみである。

ところで談話指示性について、「肯定文中の不定名詞句は、その名詞句を含む文があらわす命題が真であると、主張、含意または前提されている場合に談話指示性は成立する」ということがわかっている。(6)で不定名詞句 'a car' は補文の命題に含まれているのだから、think の文では、補文の命題の真が主張、含意または前提されており、doubt と wonder の文では、補文の命題の真は主張、含意または前提されていないということになる。

ところで(6a), (6b)の第一文を否定文にするとどうなるだろうか。

- (7) a I don't think John has *a car*. \*Bill has seen *it*.  
b I don't doubt John has *a car*. Bill has seen *it*.

(6)とは逆に、think の文では不成立、doubt の文では成立する。この談話指示性の問題は、前節で扱った some-any の問題と関係があると思われる。即ち(1a), (2b)のような some があらわれる場合と平行的に談話指示性は成立している。

### 1.3 補文の種類

ここでは、think, doubt, wonder が取りうる補文の種類について検討

する。補文の種類には、that 節、whether 節 (if 節)、wh 節の三種類がある。まずこれら三種類の節の違いを明らかにしておこう。

(8) He told me that he had passed the exam.

(9) He told me whether he had passed the exam.

that 節を用いた(8)が発せられると、that 節であらわされている命題が実際におこった、ということが、情報として聞き手に伝えられる。これに対して whether 節を用いた(9)では、単に命題内容が述べられているだけで、そのでき事が実際におこったかどうかは不明である。(9)を聞いた人は、“Well, and did he pass it?” と聞き返すであろう。更に、

(10) a That he passed the exam is certain.

b \*That he passed the exam is not certain.

(11) a \*Whether he passed the exam is certain.

b Whether he passed the exam is not certain.

のように、命題の「実現」をあらわす ‘certain’ のような語との共起関係は、that 節と whether 節とでは逆になる。要約すると、that 節はその命題が実現したものとしてとらえられている時用いられ、一方 whether 節は、ただ命題が述べられているだけで、実現に関しては無指定であるということになる。

次に wh 節について考えてみよう。

(12) He told me who had passed the exam.

(12)の wh 節には ‘who’ という未知項が含まれている。wh 節はすべて命題の中に未知項を含んでおり命題そのものが未完成である。したがって、命題の実現云々ということは問題にならない。

以上のように整理しておいて、問題の三つの動詞について見てゆく。

(13) a I think that John bought a car.

b \*I think whether John bought a car.

c \*I think who bought a car.

think は that 節しかとることができない。

- (14) a I doubt that John bought a car.  
b I doubt whether John bought a car.  
c \*I doubt who bought a car.

doubt は that 節と whether 節をとることができる。

- (15) a \*I wonder that John bought a car.  
b I wonder whether John bought a car.  
c I wonder who bought a car.

wonder は whether 節と wh 節をとる。

#### 1.4 挿入句 (parenthesis)

挿入句は発話に対する話し手の態度をあらわし、発話の力を修正ないし弱める働きを持つ。think, doubt, wonder が挿入句としてどのように用いられるか見てゆこう。

- (16) a John bought a car, I think.  
b \*John bought a car, I doubt.  
c \*John bought a car, I wonder.

平叙文に対しては think のみ挿入句として用いられる。

- (17) a \*Did John buy a car, I think?  
b \*Did John buy a car, I doubt?  
c Did John buy a car, I wonder?

yes-no 疑問文に対しては wonder のみ可能。

- (18) a \*Who bought a car, I think?  
b \*Who bought a car, I doubt?  
c Who bought a car, I wonder?

wh 疑問文に対しても wonder のみ可能。

挿入句を補文前置 (complement preposing) によって生じると考えるならば、その共起関係はそれぞれの動詞が取りうる補文の種類から予想で

きる。平叙文は **that** 節，**yes-no** 疑問文は **whether** 節，**wh** 疑問文は **wh** 節にあたるので，(13)，(14)，(15)から，**think** は平叙文と，**wonder** は，**yes-no** 疑問文，**wh** 疑問文と共起することが予想され，(16)，(17)，(18)は実際その通りの結果を示している。ところで **doubt** はその取りうる補文の種類から考えて，平叙文，**yes-no** 疑問文と共起する，と予想されるが，実際にはいずれも不可である。しかし(19)のように否定形にすると，

(19) John bought a car, I don't doubt.

のように平叙文とともに用いることができる。

### 1.5 間接発話行為 (indirect speech acts)

間接発話行為とは，ある文を発した場合，その文が文字通りの意味とは異なる意味で使われる場合のことである。

(20) Can you reach the salt?

(20)の文字通りの意味は，「塩に手が届きますか」という疑問文であるが，実際には「塩を取って下さい。」という「依頼」の意味で用いられる。即ち(20)は，間接発話行為として，「依頼」という発話の力 (illocutionary force) を持つわけである。これと同じことが **wonder** の文にも見られる。

(21) I wonder if you could help me.

(21)は文字通りは単なる陳述の文であるが実際に発話された場合には，「依頼」の力を持ち得る。このような現象は，**think** や **doubt** の文ではほとんど見られない。

2. 第1章で **think**，**doubt**，**wonder** に関する様々な言語事象を見てきた。これらの事実から次のようなことが言える。**think** は補文の命題に対して肯定的，**doubt** は補文の命題に対して否定的，**wonder** は補文の命題を未定なものとしてとらえている。このように考えて第1章で見てきた言語事象がうまく説明できるか再検討してみる。

## 2.1 think

think の文は、補文の命題についての肯定的主張を行なっている。従って(1a)では「本」の存在に関して肯定的であり ‘some’ が用いられる。また肯定的主張ということは補文の命題が真であると主張しているわけだから、(6a)のように談話指示性が成立する。取りうる補文の種類に関しては、think は that 節のみである。that 節というのは第1章3節で示したようにその命題の実現に関して指定を持つ。think が与える指定は肯定的つまり命題の実現を真ととらえていることになる。このように think は補文命題について肯定的主張を行なうものであるから、補文命題の真理値が定まっていないことを示す whether 節や wh 節はとらない。

挿入句については、

(22) I think the wizard will deny your request.

から補文が前置されて、

(23) The wizard will deny your request, I think.

が生じると考えられる。そしてこのような補文前置が行なわれるのは、話者又は主語が補文命題の真理値について肯定的態度を持っている場合である。<sup>2)</sup> 補文前置が行なわれることから、think の文において実際に主張されているのは補文命題であると言える。このことは付加疑問の生成や否定辞上昇 (neg-raising) によっても示される。

(24) I think this car needs a turn-up, doesn't it ?

一般に付加疑問では、主語は主文の主語を、助動詞も主文のものを繰り返すのが普通であるが、(24)では補文から付加疑問が生成されている。つまり(24)において実際に主張されているのは補文の命題である。<sup>3)</sup> また、

(25) a I think these living conditions are not suitable.

b I don't think these living conditions are suitable.

これら二文は同じ意味であり、‘not’ は think を否定しているわけではない。(25b)は(25a)の補文中の ‘not’ が主節中に上昇してできたもので ‘not’



は実際の主張部分である補文の命題を否定している。

## 2.2 doubt

**doubt** の文は補文の命題に対して否定的である。(1b)では「私」の思考の中では「本」の存在に関しては否定的であるから ‘any’ が用いられる。補文命題の真は主張されておらずむしろ否定されている。従って談話指示性は成立しない。(2b), (7b)のように否定文となると、否定的態度の否定で、補文の真が強く主張されることになり、‘some’ が用いられ、談話指示性も成立する。

補文に関しては、**doubt** は **that** 節と **whether** 節をとる。**that** 節は命題の実現に関して何らかの指定をもつが、これには肯定と否定、即ち実現が真の場合と偽の場合が考えられる。**doubt** に続く **that** 節は、**think** の場合とは逆に、命題の実現に関して偽であると主張されている。**whether** 節は命題の実現に関して無指定であり、**doubt** に続く場合も基本的には無指定と考えられるので(26)のような文も可能である。

(26) I doubt if John has a car. But perhaps he has.

しかしながら、**whether** 節のもとになる yes-no 疑問文には、否定語を含んだ否定に傾いた疑問文があるが、**doubt** に続く **whether** 節の場合も **doubt** によって否定に傾いていると考えられる。もし **doubt** の文が否定、肯定の傾きに関して全くの中立であるならば次の(27)は **wonder** の(2)の文同様「依頼」の力を持ってよさそうである。

(27) I doubt whether you could help me.

しかし(27)は「陳述」の力のみで「依頼」をあらわすには用いられない。**doubt** における **whether** 節はやはり何らかの色づけを持っていると言えそうだ。

挿入句に関しては、(16), (17), (18)で示した通りいずれの場合も **doubt** は挿入句にはならない。**doubt** は補文命題に対して否定的態度を示すものであるから補文前置は行なわれない。

(16b) \*John bought a car, I doubt.

(16b)のように言うと、前半では命題の真を主張しているにもかかわらず後半ではそれを否定することになり矛盾が生じる。ところで *doubt* は否定形にすると(19)で示したように挿入句として用いられる。これは否定的態度の否定で *think* に近い意味になるからに他ならない。

今 *doubt* は否定形にすると *think* に近い意味になると述べたがこのことは(2b)や(7b)によっても示される。(2b)では 'some' が用いられ、(7b)では談話指示性が成立している。しかし *think* と 'not doubt' は微妙に意味が違っている。ここで簡単に *think* と 'not doubt' の違いを見てみよう。

(28) a I think this car needs a turn-up, doesn't it? (=24)

b I don't doubt this car needs a turn-up, \*doesn't it?

*think* の文では補文からの付加疑問が可能であるが 'not doubt' の文ではできない。又、文の代用形の *so* との共起に関しては、

(29) a I think so.

b \*I don't doubt so.

のように 'not doubt' の文では *so* は用いられず、文の代用形としては 'it' を用いる。これらの事実と、*think*、'not doubt' はどちらも挿入句になれるということから、*think* は弱主張述語 (weak assertive) であり 'not doubt' は強主張述語 (strong assertive) だと言える。<sup>4)</sup> つまり 'not doubt' は *think* よりも強く補文命題の真を主張している。

### 2.3 wonder

*wonder* の文は補文の命題を未定なものとしてとらえている。補文の命題の中の不定名詞句であらわされるもの ((1c)では *books*) の存在は主語にとって不明である。存在が確定していないのだから *some-any* に関しては *any* が用いられ、談話指示性も成立しない。

思考動詞としての *wonder* は否定形で用いられることはないがこの理

由は次のように考えられる。そもそも否定というのは命題の真理値を変える働きを持つのであるが、wonder の文では補文の命題の真理値ははじめから未定であるから、これを否定することはできないのである。

補文については、wonder の文では補文命題の真理値が未定であるというのだから、実現に関する指定を持つ that 節はとれない。wonder がとるのは真理値が決まっていない whether 節と wh 節だけである。

上記のことからも予想されるが、挿入句としては疑問文としか共起しない。‘I wonder’ という挿入句は発話命題の真理値が未定であることをあらわしているので当然疑問文としか共起しない。<sup>5)</sup>

最後に間接発話行為についてふれておく。第1章5節でも述べたように、英語では疑問文を言って「依頼」をあらわすという言い方が慣用的に成立している。wonder の文は形の上では陳述文であるが補文の命題が未定であることを主張しており、そこから疑問の力が出てきて更に依頼へと発話の力が移ってゆく。即ち、陳述→疑問→依頼というように発話の力が変化している。

### 3. 主語と認識世界

今まで取り扱ってきた例文は、主語が一人称のものばかりであった。ここでは主語が変わるとどのような変化がおこるか談話指示性に関してとりあげながら簡単に見てゆきたい。

(6b), (6c)をもう一度みてもらいたい。

(6) b I doubt John has a car. \*Bill has seen it.

c I wonder if John has a car. \*Bill has seen it.

(6b), (6c)はいずれも主語は‘I’であるから、doubt, wonder の補文の中は話し手の思考をあらわす。後半の文も主張文であるから話し手の思考をあらわす。同じ話し手の思考の中で、前半の文では‘a car’の存在は否定又は未定とされ、後半の文ではその存在が真であると主張され矛盾がおこっており、談話指示性は成立しない。ところで前半の文と後半の文がそれ

ぞれ異なる人の思考をあらわしていたらどうなるだろうか。

- ⑩ a Mary thinks John has a car. Bill has seen it.
- b Mary doubts John has a car. Bill has seen it.
- c Mary wonders if John has a car. Bill has seen it.

⑩では、think の文だけでなく doubt や wonder の文でも談話指示性は成立している。⑩では前半の文の補文の中は Mary の思考であり、後半は話し手の思考である。‘a car’ の存在が不確定なのは Mary の思考の中であって話し手の思考の中ではない。このように思考が別々の人のものであれば談話指示性が成立することもある。更に次の例はどうであろうか。

- ⑪ a I doubt that John has a car and that Bill has seen it.
- b I wonder if John has a car and if Bill has seen it.

⑪では談話指示性は成立している。これは(6b), (6c)の場合とは異なり、‘a car’ も ‘it’ もどちらも doubt や wonder の対象としての認識世界の中にはいりこんでいるからである。また、

- ⑫ I doubt John has a car. I've never seen it.

⑫では後半の文は doubt の補文ではないのに談話指示性は成立している。これは後半の文の ‘never’ という語により doubt と共通の認識世界が作り出されているためと考えられる。<sup>6)</sup>

#### 4. 結び

以上の考察に基づいて要約すれば、think, doubt, wonder のあらわす心的状態は次のようにまとめることができる。

think の文では主語は補文の命題の実現に対して肯定的である。逆に doubt の文では主語は補文の命題の実現に対して否定的である。また wonder の文では補文の命題を真理値が未定のものとしてとらえている。即ち疑問的である。このような思考動詞を扱う時は、誰のどのような認識世界をあらわしているかを考えることが必要不可欠である。

## 注

1) 'I wonder' の否定形として, 'I don't wonder' の形があるが, 筆者の調査によれば, この時の wonder は 'be surprised' の意味で, 思考動詞としての wonder は否定形では用いられない。

2) 補文前置に関しては Hooper (1975) を参照。

3) think の文が常に補文命題からの付加疑問しかできないわけではなく, 主語の人称, 時制等によって変ってくる。

John thought the car needed a turn up, didn't he?

4) 弱主張述語 (weak assertive) 強主張述語 (strong assertive) に関しては Hooper (1975) を参照。

5) 補文前置に関する Hooper (1975) の議論は補文が that 節の場合のみであり, whether 節 wh 節の場合に関しては何も言っていないが, wonder の場合も挿入句は補文前置によってできると考えてよい。また補文前置ができるということは, 実際の主張部分が補文の命題であることを示す。wonder の文も think の場合同様, 補文からの付加疑問形成が可能である。

I wonder if John has a car, has he?

6) 談話指示性はかなり複雑な問題で, 名詞句の特定性 (specificity) と深い関係があるが, ここではこれ以上立ち入らない。

## 参 考 文 献

Hooper, John B. (1975), "On Assertive Predicates," in John P. Kimball ed. *Syntax and Semantics*, vol. 4 New York: Academic Press.

Jackendoff, R.S. (1972), *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, Cambridge, Mass.: M.I.T.

Karttunen, Lauri (1969), "Discourse Referents," presented at the International Conference on Computational Linguistics, Sönga-Säby, Sweden.

Keene, Dennis and T. Matsunami (1969), *Problems in English*, Tokyo: Kenkyusha.

Leech, Geoffrey and Jan Svartvik (1975), *A Communicative Grammar of English*, London: Longman.

think, doubt, wondre の語法研究 (川瀬)

Lehrer, Adrienne (1974), *Semantic Fields and Lexical Structure*,  
Amsterdam: North-Holland.

Quirk, R. *et al.*(1972), *Grammar of Contemporary English*, London:  
Longman.

Searle. J.R. (1975), "Indirect Speech Acts," in Peter Cole and Jerry  
Morgan, eds. *Syntax and Semantics*, vol. 3 New York: Academic  
Press.